

ISSN 0288-4364

オーウェル研究

第 38 号

特集 『一九八四年』



日本オーウェル協会

『一九八四年』さながらの中国 「デジタル・レーニン主義」体制

西川 伸一

2018年12月5日付で松原仁衆院議員（無所属）が、政府に対して「デジタル人格権を尊重することによる反デジタル・レーニン主義に関する質問主意書」を提出した。質問主意書とは、国会議員による内閣に対する国政一般をめぐる質問を記した文書のことをいう。これは議長（この場合は衆院議長）に提出され、議長が承認すれば内閣に転送される。内閣は原則として受け取った日から7日以内に答弁書を作成して、閣議決定ののち議長に回答しなければならない。

この質問主意書で松原議員は「ドイツの政治学者セバスチャン・ハイルマン氏は、「デジタル・レーニン主義」という言葉で、中国共産党が進んだデジタル技術を統治に活用する手法を名付けた。デジタル・レーニン主義によって、中国共産党政府は、個々人のデジタル社会での人格的価値を無視して、個々人の趣味趣向や政治信条を推認する情報を幅広く収集するとともに、逆に個々人のオンライン上の主張が中国政府と反対の時にはこれを遮断することで、共産党政府にとって危険な存在となりうる人物の特定・把握を効率よく進めている」と指摘した。すなわち、中国はオーウェルが『一九八四年』で描いた監視体制を、デジタル技術を駆使することで実現しつつあるというわけだ。

その一つに「天網」システムがある。これはネットワーク化された監視カメラと人工知能（AI）をつなげて顔認証で特定人物をつきとめるものである。犯歴データなどと突き合わせれば犯罪者を容易に摘発できる。2018年4月20日付『毎日新聞』によれば、中国全土で1億7000万台の監視カメラが設置されているという。1年経ったいま、この現代のテレスクリーンはどれほど増えていることか。また、2017年に施行されたインターネット安全

法は、ネット業者に国への情報提供などの協力を義務づけている。個人情報のまさにビッグデータを国は掌中に収めることができる。

個人情報の中でも購買履歴は他人に最も知られたくないものの一つであろう。ところが、中国では急速に進むキャッシュレス化とともに、それすらガラス張りに近い状態になっている。銀行口座に紐付けられたスマートフォンで決済することで、その履歴はネット業者に蓄積されていくからだ。そして情報は国に提供されよう。

中国は国策としてネット普及を推し進めてきた。確かにそれは国民に大きな利便性をもたらす。たとえば前出の記事には、「出前アプリで数千軒の料理店から好みの品を選ぶと、30分後には熱々の料理が届く」と紹介されている。ただしそのためには、氏名、顔写真、ネットでの購買履歴をはじめいくつもの個人情報の提供に本人が同意することが条件なのだ。それでも人びとはむしろ嬉々としてこの条件を受け入れる。その理由を2018年1月9日付『産経新聞』は次のように伝えている。電子商取引大手のアリババが運営するアリペイというオンライン決済サービスでは、利用者の信用度が950点満点で評価される。「点数が高いと消費者金融から無担保で借り入れができるほか、ネットで公開すれば“称賛”を浴びることもでき、メンツが立つ。だが支払い滞納で点数が下がると、鉄道チケット購入が制限されるなど、生活に支障が生じるしくみだ」という。利用者は点数を上げようと躍起になるだろう。ネット普及によるキャッシュレス化は利便性の向上のみならず、信用度という個人の格付け意識をくすぐる。

中国のビッグブラザーは人びとのこうした心理に巧みにつけこみ、ソフトな仮面をかぶって「デジタル・レーニン主義」体制を構築してきたのである。その仮面を一枚むけば、2014年に打ち出された「社会信用システム」の実現が待ち構えている。これは個人情報ビッグデータに基づき、国民一人ひとりを信用度に応じてランキングしようとするもの

だ。個人は完璧に監視され、管理され、評価される。社会主義初級段階の終期と位置づけられる今世紀半ばには、13億の国民すべてを対象にこの逆ユートピアシステムが機能していることだろう。

翻って日本では、2018年6月15日に「世界最先端デジタル国家創造宣言・官民データ活用推進基本計画」が閣議決定された。個人情報情報の取扱いについては、「個人情報保護法の規定に則った個人情報等の適正な取扱いが確保されるよう留意」するとそこに謳われている（「基本計画」38頁）。しかし、デジタル化の促進は社会の『一九八四年』化を招きかねないことを忘れてはなるまい。松原議員は上記の質問主意書でこう主張している。「人権尊重を憲法の基本理念の一つとする日本国においては、デジタル・レーニン主義は、決して受け入れることができない考え方である」。デジタルなど想像だにできなかったオーウェルが、いまに至るも想起される。やはり政治の本質をつかんでいたと脱帽せざるを得ない。